

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520003

研究課題名(和文) フリードリヒ・ヤコービの哲学

研究課題名(英文) The Philosophy of Friedrich Jacobi

研究代表者

佐山 圭司 (Sayama, Keiji)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80360965

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀末ドイツにおけるスピノザ復興に大きく貢献したフリードリヒ・ヤコービの『スピノザ書簡』は、スピノザを頂点とする、デカルト以降の合理主義哲学を批判しながら、ヤコービが自らの哲学的立場を表明した書である。したがってこの本は、彼の哲学が解明されてはじめて十分に理解できるものである。こうした観点から本研究は、これまで日本において無視されてきた彼のふたつの哲学小説『アルヴィル』、『ウォルデマール』や政治・経済論文を含めて、ヤコービの哲学の全体像を解明しようと努めた。

研究成果の概要(英文)：The "Spinoza letters" of Friedrich Jacobi which contributed largely to Spinoza Renaissance in late 18th century Germany is not only a criticism of Spinozism as a climax of the rationalism philosophy since Descartes, but also a representation of his own philosophical position. Therefore this influential book is not sufficiently understood unless Jacobi's philosophy is explained. From such point of view, the present study tries to elucidate Jacobi's works, especially his two philosophical novels "Allwill" and "Woldemar", his political and economic works which have been disregarded in Japan.

研究分野：哲学

キーワード：ヤコービ スピノザ主義 自由主義 哲学小説 死の跳躍

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 日本ではもっぱら『スピノザ書簡』の著者として知られているヤコービだが、彼は、レッシングの「スピノザ主義」をめぐるメンデルスゾーンとの論争に端を発する汎神論論争にとどまらず、カント、フィヒテ、シェリングへの鋭い批判、またラファーター、ハーマン、ヘムスターヘウス、ヘルダー、ゲーテらとの交流によって、同時代知識人に非常に高く評価されていた人物であった。啓蒙と反啓蒙、カントの批判哲学、ドイツ観念論、ロマン主義、自由主義といったさまざまな思想的潮流がせめぎ合う時代において彼は、哲学はもとより、広く文芸活動一般に積極的にコミットし、後継世代に幅広い影響を与えた。それゆえのちの哲学史家クーノー・フィッシャーは、「ヤコービにおいてカント以降のあらゆる傾向が交差している」とまで述べている。

(2) ドイツでは、こうした思想的潮流の交差点としてのヤコービが、近年さまざまな立場から見直されており、Klaus Hammacher や Walter Jaeschke らによる厳密なテキストクリティークにもとづく著作集が刊行中のほか、Birgit Sandkaulen をはじめ気鋭の研究者によるモノグラフィも続々と上梓されている。にもかかわらず、わが国では哲学史や思想史において、カント批判、ブルーノやスピノザ再評価への貢献、そしてドイツ観念論との関連といったトピックで取り上げられる程度で、ヤコービの哲学を総体的に論じた研究書はまだ存在していない。ヤコービの著作の翻訳も、管見によれば、栗原隆氏による訳業(『デイヴィット・ヒューム』および『フィヒテ宛て公刊書簡』)いずれも新潟大学大学院現代社会文化研究科共同研究プロジェクトの学術誌『世界の視点 知のトポス』に掲載)が登場し、「ゲーテ自然科学の集い」の機関誌『モルフォロギア』に長年にわたって『スピノザ書簡』の邦訳を連載してきた田中光氏によって、『スピノザ書簡』の全訳が近々刊行予定で、日本におけるヤコービ研究は、ようやく本格的に始まりつつあると言える。

## 2. 研究の目的

(1) 啓蒙哲学ならびにカントの批判哲学から、疾風怒濤、ドイツ観念論、ロマン主義、自由主義までさまざまな思想的潮流の生成・発展に大きくかわりながら、これまで十分に解明されてこなかったフリードリヒ・ヤコービの哲学の全貌を明らかにし、将来的には日本で始めての本格的モノグラフィを執筆する。

(2) これまでの研究においてヤコービの哲学は、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルといった名だたる哲学者たちと繰り広げた論争との関連においてのみ取り上げられ、しかもこれらの哲学者の立場から裁断されること

が少なくなかった。しかも自らの思想を主に書簡や批評のなかで展開した彼は、哲学史においても、体系構築を目指したこれらの哲学者に比べて数段格下の「批評家」として低く評価されがちであった。だが大哲学者たちの激しいヤコービ批判は、彼がその当時、いかに大きな影響力を持っていたかを雄弁に物語っている。したがって大思想家たちの言葉にとらわれずに、ヤコービの思想を彼自身に語らしめたときにはじめて、こうした先入観も克服可能となるだろう。

(3) さらに留意したいのは、領域横断的かつ言語横断的に思考する彼のスタイルである(ちなみにライプニッツ、スピノザ、ブルーノを論じた『スピノザ書簡』では、フランス語、ラテン語、イタリア語の原文から縦横に引用されている)。硬直した体系を嫌い、文学・芸術から政治・経済まで越境的に議論を展開するそのスタイルが、彼を「哲学者」として正当に扱うことを難しくしてきた。そこで、文学・思想から政治・経済にまでいたるヤコービの広範囲にわたる知的活動を同時代の思想的コンテクストにおいて再現することによって、わが国におけるヤコービ研究の先鞭をつけてみたい。それにより、体系重視の哲学史が見落としてきた諸問題に光を当てるだけでなく、領域横断的な研究としても、独自性を示すことができるのではないかと思う。

## 3. 研究の方法

(1) 地方の小さな大学に勤務する研究代表者にとって本研究を遂行するうえで障害になったのは、基本文献の不足と研究上の刺激の欠如であった。勤務先の図書館あるいは研究代表者個人の蔵書ではまったく不十分であるため、基礎文献の収集に多くの時間と労力をかけなければならなかった。もちろんインターネット等の普及により以前に比べて資料調査・収集がずっと容易になったとはいえ、国内外の図書館・研究機関を定期的に訪れて、積極的に文献収集に努める必要があった。そのため、ヤコービに関する研究文献を、国内外において継続的かつ精力的に収集することを研究上の大きな柱とした。国内においては首都圏各大学の図書館、ドイツにおいては、とりわけドイツ啓蒙主義およびヤコービ関連文献を多数保有するマルティン・ルター大学ハレ=ヴィッテンベルクの附属図書館ならびにヨーロッパ啓蒙研究のための学際センター(IZEA)を文献収集の拠点とした。

(2) まず本国ドイツにおける研究成果を積極的に吸収し、現在のヤコービ研究の到達点を確認することから始めた。ただし限られた研究期間内にヤコービの全体像を余すことなく解明することは不可能であるので、彼の多方面にわたる文筆活動を、年代と分野を考慮して以下の4つに分け、研究対象を絞った。つまり、第一は、『政治的ラプソディー』『続・

政治的ラプソディー』をはじめとする政治・経済論である。第二が、『アルヴィル』や『ヴォルデマール』といった哲学小説、第三は、『スピノザ書簡』を中心とした汎神論論争にかかわる著作群、第四が、『フィヒテ書簡』をはじめとするドイツ観念論にかかわる著作群である。このうち第三は、日本でもスピノザ研究者とドイツ観念論研究者の双方から研究されており、応募者もこれについてはいくつか論文を発表してきた。また第四についても、日本のドイツ観念論研究のなかでしばしば言及されてきた。その一方で、第二の文学作品は、ドイツの文学史研究において取り上げられているにもかかわらず、日本ではヘルダーリンやヘーゲルが青年時代に愛読した作品として紹介される程度で、ほとんど注目されていない。そして第一の政治・経済観にいたっては、応募者の知るかぎり、わが国では学术论文が一つも存在していない。海外においては、たとえば最近杉田孝夫氏によって邦訳されたフレデリック・バイザーの『啓蒙・革命・ロマン主義 近代ドイツ政治思想の起源 1790-1800』において「ヤコービを無視して一七九〇年代のドイツ政治哲学の歴史を語ることはできない。……というのは、ヤコービは一七九〇年代の新しい自由主義の最も初期のそして最も傑出した代表者の一人だからである」とまで評価されているにもかかわらず、である。

(3)そこで、研究蓄積のある第三、第四の著作については内外の成果を十分に活用させていただき、本研究では、日本において顧みられることの少なかった第一と第二の著作の検討に多くの時間と労力を割いた。とりわけ、これまで無視されてきた政治哲学者・経済理論家としてのヤコービに光を当てることによって、「信仰の哲学」あるいは「感情の哲学」というレッテルで済まされているヤコービの哲学が、実は多面的で複雑であることを示した。そのためにも、ヤコービが同時代知識人と育んだ多様な知的交流関係を可能なかぎり考慮した。

#### 4. 研究成果

(1)2012(平成24)年度は、第一のジャンルに属する著作群、すなわち『政治的ラプソディー』『続・政治的ラプソディー』『レッシングが語ったこと』などの政治・経済論文を中心に研究を進めた。ここで得られた成果は、社会思想史学会第38回大会(2013年10月27日、関西学院大学)で「フリードリヒ・ヤコービの自由主義」と題して発表した。

(2)2013(平成25)年度は、第二の著作群、とりわけ『アルヴィル』や『ヴォルデマール』の検討に進んだ。この両著は、それぞれ1775年と1777年に最初に発表されてから、1792年と1796年に最終版が出るまで、何度も手を加えられているが、この二つの哲学小説執筆の直接的なきっかけが、シュトルム・ウント・ドラング時代の若きゲーテとの出会いで

あり、ゲーテとの関係の変化(決裂と和解)と汎神論論争以降のヤコービ自身の思想的発展によって、作品の性格が大きく変化したことを、日本哲学会第73回大会(2014年6月28日、北海道大学)で「哲学小説の誕生 フリードリヒ・ヤコービの『アルヴィル』『ヴォルデマール』を読む」というタイトルで発表した。

(3)2014(平成26)年度は、当初、第三、第四の著作群をふまえて、本研究の総括をすらすらであった。そのために準備していたのが、日本倫理学会第65回大会(2014年10月5日、一橋大学)で発表した「信への Salto mortale フリードリヒ・ヤコービにおける倫理と宗教」であったが、研究上の「新たな知見」により、この発表で本研究を締めくくることができなかった。

(4)この点を少し立ち入って説明すると、ここまでの研究で重視していた同時代知識人は、レッシングやメンデルスゾーンをはじめとする啓蒙主義者、ヴィーラントやゲーテのような文学者、そして、カントとドイツ観念論の哲学者であった。だが、『スピノザ書簡』刊行前後から彼の思想に決定的な影響を与えたのは、ヨーハン・ゲオルク・ハーマンであった。ハーマンにとっても、ヤコービとの出会いは、非常に重要であった。ハーマンが1788年に没した後、ハーマンの最初の解説者たらんとしたのはヤコービであったし、ヤコービが実現できなかったハーマン著作集を編集・刊行したのは、ヤコービの弟子フリードリヒ・ロートであった。もしハーマンに「弟子」と呼ばれる者がいるとすれば、人生前半のもっともすぐれた「弟子」はヘルダーであり、人生後半の「弟子」は明らかにヤコービであった。たとえば、ヘーゲルは、ゲーテに激賞された晩年のハーマン論で、ヤコービがいかにハーマンから学んでいるか強調している。またミュンヘンでヤコービと論争中だったシェリングは、ハーマンの哲学がヤコービの理解をはるかに超えていたと皮肉っている。このように同時代人にとって両者の親近性は、非常に明らかであった。

しかしながら、現代のハーマンあるいはヤコービ研究をみるかぎり、この当たり前の事実がほとんど忘れられているようである。いくつかの例外はあるものの、ハーマン研究においては、その難解な著作の解説のためにヤコービ宛書簡が引き合いに出されるのがせいぜいで、近年ドイツにおいて活性化しているヤコービ研究においては、その傾向がさらに顕著である。おもにドイツ観念論の研究者たちが主導している専門研究において、ヤコービは、カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルといった哲学史のメインストリームをなす体系哲学者と積極的に関連づけられ、体系哲学を拒絶し、のちにキルケゴールに高く評価されたハーマンの後継者としての一面は、後景に退いている。

もちろん、それは理由のないことではな

い。従来の哲学史・思想史において、ハーマンやヤコービは、反啓蒙主義者、あるいは現代における非合理主義の先駆者として、著名な啓蒙主義者達の「脇役」として登場するにすぎなかった。彼らを正當に再評価するためには、なによりもまず「信仰」や「感情」の熱狂的な信奉者というレッテルから、彼らを解放しなければならなかったのである。かくして、非合理主義者としての側面は、半ば意図的に忘却され、彼らの思想それぞれがもつ「合理性」が強調されることになった。しかし、それにより、彼らの理性批判の本来の鋭さが、ともすれば鈍化されてしまったように見える。こうした傾向は、ドイツにおける昨今のヤコービ研究においてとくに顕著だと言わざるをえない。

最近のドイツにおける研究成果から出発した本研究も、こうしたハーマン・ヤコービ関係の忘却を「暗黙の前提」としていた。しかし、研究の途上でこの「暗黙の前提」が孕む問題性に気づき、最近のハーマン、ヤコービ研究の成果をふまえて、両者の関係をあらためて検討することなしには、本研究を終了できないとの結論に達し、研究期間を1年間延長することにした。そして、この延長期間に、ドイツにおけるヤコービ研究の第一人者と目されるボーフム大学の Birgit Sandkaulen 教授を囲んで開催された国際会議においてハーマン・ヤコービ関係を再考する必要性を訴える一方で、ハーマン・ヤコービ関係を盛り込んだ形で日本倫理学会の発表原稿を書き直し、『「信」への「死の跳躍」 「時代の精神形成の転換点」としてのフリードリヒ・ヤコービ』として発表した。

## 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計4件)

Keiji Sayama (佐山圭司)、Glaubensphilosophie oder Unphilosophie. Die Philosophiekritik von Hamann und Jacobi. (「信の哲学あるいは非哲学 ハーマンとヤコービの哲学批判」) 国際会議「ドイツ古典哲学研究の新段階」、2015年10月15日、一橋大学(東京都・国立市)

佐山圭司、「信」への Salto mortale フリードリヒ・ヤコービにおける倫理と宗教、日本倫理学会第65回大会(2014年10月5日、一橋大学(東京都・国立市))

佐山圭司、哲学小説の誕生 フリードリヒ・ヤコービの『アルヴィル』『ヴォルデマール』を読む、日本哲学会第73回大会、2014年6月28日、北海道大学(北海道・札幌市)

佐山圭司、フリードリヒ・ヤコービの自由主義、社会思想史学会第38回大会、2013年10月27日、関西学院大学(兵庫県・西宮市)

〔図書〕(計1件)

佐山圭司 他、梓出版社、『危機に対峙する思考』(第2編第4章、「信」への「死の跳

躍」 「時代の精神形成の転換点」としてのフリードリヒ・ヤコービ)、2016、255-272

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐山 圭司 (SAYAMA, Keiji)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80360965